
その九尾、人間につき

碧城 林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その九尾、人間につき

【Nコード】

N7523X

【作者名】

碧城 林檎

【あらすじ】

気が付いたら九尾になっていた。しかしそう悪いものでもない。だっていつでも尻尾をモフモフ出来……ない？ゴワゴワだと……！？早く外に出て尻尾を洗わねば！
そんな感じで送る人外憑依録。

その九尾、苦悩につき

「なんじゃ？ ワシに見せつけに来たのか？」

「うふふつ、あなたとも仲良くなれたから記念にね。ね、ミナト」

「そうだねクシナ。九尾もある日を境に途端に人が変わったみたいになってくれたから俺も嬉しいよ」

「人が変わった……のう」

ミナトと呼ばれた男の言葉に反応して、ワシは自分に言い聞かせるように復唱した。

この見るからに醜悪な九尾の姿を見て「人」が変わったとはよく言えたものだ。確かに中身は人ではあるが、外見はどうみても人には見えないだろう。

それでもそう言えるのは、悔しいことにミナトがイケメンだからだろう。これがイケメンのイケメンたる所以か、チクシヨウ。

聞いてわかる通り、ワシは人間の記憶を持ったまま人外へと憑依した。どういう原理かはわからないがそういうことなので納得するしかない。

それよりも今は大事なことがあるんじゃよ。

目の前で少し大きくなったお腹を抱える赤髪の女性とその横に立ってそれを微笑ましげに見つめる金髪の男性。くそっ……リア充は見てるだけでイライラするからム力つくんじゃ！

……そうじゃのうて、その二人がクシナとミナトであり、ワシは

これを前世のナルトという漫画で見たことがある。つまりワシはナルトの世界に来て九尾に憑依した、というわけじゃ。

最初こそわけがわからなかったが、いい加減にもう慣れた。クシナの視点から外を覗いて見ても登場人物がわんさかおったし、信じられないじゃろう。

「そうか。それならさっさと帰るがよい。用事が済んだじゃろう」

「むう。お祝いの言葉の一つくらい掛けてくれてもいいってばね」

「ここから出すなら考えてやらんこともないがのう。どうだ、四代目。良い取引じゃろう?」

「そこまでしてキミからの祝福の言葉は欲しくないかな」

くすくすと笑うクシナに爽やかに笑うミナト。これはあれか?

ワシがこやつらをぶっ殺してもいいというフラグと解釈して問題ないかのう?

しかしこの夫婦は本当にムカつく。こっちは封印されて無理矢理引きこもりにさせられとるのに、リア充滿開で毎晩毎晩見せつけおつて。見たくもないものを見せられる身にもなってみろ。

「男が男のアレな姿を見て興奮できると思うか? せめてクシナを見れたら……」

「……九尾、思考が駄々漏れてるよ」

「その反動で貴様が封印を解いてくれたら万々歳だったんじゃないかのう。そう上手くはいかんか」

ミナトのクシナの溺愛具合から見てこうやって煽れば激情すると思っただんじゃがそうでもなかったか。その代わりクシナの方がこっちを睨んでおるわい。

「私の体はミナトだけのものだってばね。九尾なんかには絶対に見せてあげないんだから！」

「俺の体もキミのためだけにあるよ、クシナ」

「ミナト……」

「……いい加減人の目を気にしたらどうじゃ？」

目の前でイチヤイチヤする夫婦はワシの目には毒でしかないからやめてほしいんじゃ。

「あなたは尾獣だから気にしないででもいいのよ」

「腐れ外道が。精神世界でまでやってすることじゃないじゃろう！ワシの目の届かんとこでやれ！」

しれつと答えるクシナに耐えきれず、思わず咆哮して二人を威嚇した。ワシだって青春を謳歌したいんじゃ。引きこもりなんかやめてリア充になりたいんじゃ。明日がある、明日があるずっと先延ばしにするのはもうイヤなんじゃ！

「そうは言っても九尾はクシナが見ている世界を見れるんだから隠れようがないと思うよ」

「そうじゃのう。四代目の見たくもないアレな格好や、クシナの風

呂での姿も見ちまったから今更か」

「なっ!?!? なんでもそんなときまで見てるんだってばね!」

「ふん、貴様はバカか? 逆に見ない方がおかしいじゃろう。のう、四代目。貴様もワシと同じ立場じゃったから見とるじゃろう?」

恥ずかしそうに顔を赤くするクシナを濁いた笑いで軽くスルーしながらミナトに悪戯っぽい笑みで語り掛ける。

これくらいしかワシの娯楽がないんじゃからそれくらい許してくれてもええじゃろう。

「お、俺はそんな卑怯なことほしないよっ!?!?」

「よく言うわい。自来也といっしょに女湯を覗いておったのはどのどいつじゃ」

「ミナト……?」

「ははは、冗談はやめてくれ九尾! 俺がそんなことをするはずがないだろう!?!? クシナも信じてくれ!」

「まさかワシが気付いておらんとでも思っつたのか? 目出度いやっじゃな。白を切るならワシはそれでも構わんがのう」

クシナが入つとるところを覗こうとするのは旦那としてどうかと思うが、覗きは男のロマンじゃし、仕方ないじゃろう。ただ、ワシはどちらかの肩を持つ気はない。痴話喧嘩ならワシの見えんところであってくれればそれでええんじゃ。

「あつ、クシナ。安産祈願しとるぞ」

「ふふつ、ありがとう、九尾。さあ、ミナト。用事も済んだし、現実世界でしつかりと話してくれるってばね？」

「だからこれは勘違いで　　！　くそっ！　九尾の裏切り者！」

「ワシがクシナに力を貸すことがあっても貴様に加担した憶えはないわ」

首根っこを掴まれて引きずられていくミナトを少し哀れに思いながらも、やっぱり自業自得なので庇う気はない。

安産祈願の方はワシが封印から解かれ易くするためじゃな。出産時期になると弱まると聞いておるからそこを狙って自由になりたいし、流れてしまつて出られなかったのでは元も子もないじやろう。いろいろと問題はあるが、やっぱりまずはこの尻尾のゴフゴフを直さんといかんのう。いつでもモフモフ出来るように毛並みを整えねば。

え？　　うちはマダラ？　　そんな不味そうなのはいらんわい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7523x/>

その九尾、人間につき

2011年10月20日02時11分発行